

大連の図書館サービスはすごい

● 放眼日中 ●



北京に駐在していた時以来、約9年ぶりに大連に行ってきた。正直な感想は「ビルはきれいなになり、地下鉄なども整備されてはいるが、中国

の他の都市と比べてその発展スピードは鈍化している」だった。中国経済全体に暗雲が立ち込めている中、何だか象徴的なところへ来てしまったような気がした。

地元の人にその理由を聞くと、何人もが「あの人がいなくなつてから悪くなる一方だ」との答えを返してくる。あの人は1990年代から2000年代の初めまで、大連市長・書記を歴任し、その後、商務部長から重慶市書記になった薄熙来氏だ。改革開放後の大連を東北地方で最も経済発展させたその手腕は高く評価されており、日系企業も有名企業から中小企業まで数多くがそこに工場を構えた。日本食レストランな

どもあり、日本人の生活環境も抜群だった。

大連は、薄氏の転出とその後のカンパダル、そして日系企業の衰退などにより、中国の経済発展から取り残されてきたと言つてもよいかもしれない。いや、大連だけではない。北京のある金融関係者によると「ここ数年、東北地方の案件はリスクが高いので、極力手を出さないようにしてきた」というのが正しい。

そんな大連を歩いていると、中山広場付近には旧満鉄本社や満鉄旧址陳列館などがある。大連の各地に旧満鉄社員住宅など、日本統治時代の建物も残されており、戦前の歴史遺産を武器に観光誘致を図っているようにも見える。対象は昔を懐かしむ日本人だろうか。

満鉄関連の一つに旧満鉄図書館があった。ふらつと入ったところ警備

員に怪しまれ、カウンターで訪問理由を伝えるように求められた。突然だったが、「1930年代に大連にいた日本人（実は台湾人）について調べている」と伝えると、こちらが頼んでもいないのに、ベテラン女性はすぐにどこかに電話をかけて、問い合わせをしてくれた。

そして電話を切ると「図書館本館へ行きなさい」と言い出し、「本館はどこか」と聞くと、コートを着込んで外へ出て、バス停まで連れて行ってくれた。満鉄図書館は今、大連市図書館の別館となっていたのだ。せつかくの好意なので、言われるままに30分ほどバスに乗り、本館を目指した。

立派な本館の4階に行くと、「地方文献室」という部屋があった。そこに入っていくと、係員が温かく迎えてくれ、何とこちらが必要として

いそうな本が4冊、机の上に置かれていた。「こんな資料でいかがでしょうか」と言われ、あまりのことに驚いてしまった。どこの図書館でも、資料は自分で検索などして探すものだと思つており、ここまで行政サービスをしてくれる街は初めてだった。

さらに日本統治時代の小学校や町名、道の名前などを質問すると、係の男性はすぐに検索をかけてくれ、その答えを示してくれた。これは自分でやると大変な作業なので大変助かった。日本統治時代の建物が残っている場所など、いろいろと適切なアドバイスもしてくれた。

日本人に優しい街、大連ではあるが、何とも驚くべきサービスであった。これは一部の職員の特殊なケースかなとも思うものの、何となく大連市の意欲の一端と今後の方向性を見る思いでもあった。



コラムニスト・アジアソウオッチャー
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。